
傘を広げて

沙堂 瑠々亞

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

傘を広げて

【Nコード】

N5582A

【作者名】

沙堂 瑠々亞

【あらすじ】

通り過ぎていった横顔。呼び止めることができたら、いまとちがった人生が送れていたでしょうか。

渡ろうとしたのに、横断歩道の信号は赤になっていた。

この信号を渡って左に曲がれば、家に着く。慌てて駅に行こうとする朝と違って、帰り道はこんな間の悪い時でも許せてしまうから、不思議だ。

私は傘の柄を右肩に乗せながら、曇天の空を見上げた。ぱらぱら降るのは小糠雨というらしい。服が少ししっとりとするのを覚悟であれば、傘を差さずにも帰れる細かい雨だ。それでも傘がある以上、私は広げて雨を避けている。

信号が青になった時だった。歩き出そうとして、見知らぬ影が横を通り過ぎていったのに気が付いた。信号待ちをしていたのは、てっきり私だけだと思っていたのに。

私は傘を上にならずらして、斜め前を見た。

影だと思ったのは、スーツを着た男性だった。小糠雨に降られて、ジャケットがところどころどす黒く染まっている。髪の毛濡れ羽色に光って見えた。…どうやらこの人は傘がないまま家へ帰ろうとしているらしい。

その斜め後ろの顔をちらと見ただけで　誰なのかちょっと解つてしまう自分が居た。

肩をすくめながら歩く癖がまだ直っていない。石ころを蹴飛ばすみたいに、爪先を少し上げながら歩いている。手持ち無沙汰の時には　そうやってポケットに手を入れる。相手が変わっていないのがおかしくて、自分が気付いてしまったのがおかしくて　声を掛けるにはいられなかった。

「ハンギョウくん」

先を歩いていた誰かが、名前を呼ばれて振り返る。ああ、やっぱりと思った。

横断歩道の向こう側にたどり着いた後、私はためらいもなく傘を

差し出す。

「家遠いんでしょ。少しくらい入れたげるよ」

ハンギョウくん 荻行 人誠。ハンギョウ ヒトセと読むその四字は、一見読みやすそうでたいそう読みにくい名前だった。

中学に上がりたての頃、隣の席になったのが彼だ。活発な少年はその名が示すとおり人に誠実で、いつも皆が周りを取り囲んでいた。ムードメーカーで、誰かが一人していると気さくに話しかけてきて、スポーツの試合には必ず活躍する目立ちたがり屋で、でも日常どこか抜けている少年だった。

「なんだ。まだこっちに居たのかよ」

傘を差し出した私に合わせてくれたのか、彼は持ち柄を受け取ると、自分も中に入ってきた。

横断歩道の信号機の前でふたり立ち止まり、傘の下 話をし出す。十年越しの再会なのに、久しぶり、の一言もない。だけどそれが私たちにしかつた。

「大学は寮だったんだけどね。就職先はこっちにしたから、実家暮らし」

ハンギョウくんは？と返すと、俺も似たようなもんだ、と答えてきた。彼は今、塾で専属講師をしているらしい。大学時、都内の名門学院で教育実習をして、ちゃんと教員免許も取ったのだそうだ。

「お互い前から実家に戻ってたか。近くなのによく会わなかったなあ」

偶然の再会を驚く彼に、私は合わせた。

「近いからこそ案外会わなかったのかもね。じゃあ今日の偶然は小さなキセキってことで」

嘘だ。

傘を広げて

本当は、何度も彼の後ろ姿を見ていた。中学を卒業したばかりの春休み、高校に上がってしばらくした日曜日、大学が休みの時に帰ってきた日、入社式の帰り、……何度も彼を横断歩道で見送っていた。声が掛けられずにいた。過ぎ去った過去を、呼び止めるのが怖

かった。

「お前も変わってないよな」

私の返し方を聞いて、彼が微笑んだ。近くに居るのに、思い出を懐かしむような遠い目をしていた。

「なに言ってるの。私もうおばさんだよ」

「おい、それなら俺だって年食ったってことになるだろうが」

「大丈夫。ハンギョウくんも前と変わってないから」

今度は嘘を吐かなかった。

あの時から 彼は少しも変わっていない。

いや 確かに変わっていた。身長も伸び、色黒で精悍な顔付きになった。髭を伸ばし、笑うときに皺が生じ、硝煙の匂いも纏わりつかせていた。性格も、まさかあの時の純粋な少年のままではいるはずがないだろう。

それでも、どんなにあの時から時が経っていても、私には中学生の時の彼が映っていた。

あの時の幼い彼が、同じ仕種をして、同じ喋り方で私と話していた。

「まあ、こうやって話してもらち明かないしな」

そうして 最初に会話を打ち切ったのは、彼だ。

「お前ん家は左だったっけか」と、左の方角を指して 自ずから傘の元を離れていった。

左右に分かれた道を歩いていくと、それぞれ住宅街に繋がる。

左の道に進んだ住宅街の一角に私の家があることを、彼は未だ覚えていたらしい。

貸そうか、と聞いたけれど、相手は首を横に振った。返す見込みねえだろ、なんて言われ、尤もだと納得する。

「じゃあ、また何処かで会ったら」

「うん。また何処かで会えたら」

次に会うのなんて、約束をする宛ても意味も、必要も なかったから。

振り返ることもなく彼は右に歩き出した。再び濡れ始める彼の髪。ますます濡れ羽色になっていく後ろ姿。

その後ろ姿を見送りながら、いつかの放課後を思い出していた。あの時もさらさらと降る小糠雨だったように思う。

生徒玄関で、急に降ってきた雨をぼうつとして見ていると、部活帰りの彼と鉢合わせした。

なんだお前、帰れねえの？ ……男友達にするのと同じように、彼は笑って話しかけてきた。

すつと傘を差し出される。どうしていいか戸惑っていた矢先、雨模様の鉛色の世界が、ぱつと紺色に変わった。

彼が紺色の傘を目の前で開いてみせたのだ。ワンピース式の傘は、羽根を一気に広げ、本来の形になった。

貸してやるよ。明日、絶対返せよな。

今でも覚えている。あの雨の日、無理やり渡してきた彼の傘の柄が温かかったこと。幼かった彼が照れていたこと。走り出す彼の背中を、茫然として見送ったこと。

その背中を、私は何度見てきたのだろう。あの時は、伝えられなibaかりに。今までは、過去であるばかりに。雨というきっかけがなければ、私はきつと、さっきの瞬間も声を掛けられないままだった。

それなら今日は、雨に感謝すべき日だろうか。

奥に引っ掛かっていたものを取りだして、いまいちど懐かしむ日だろうか。

……… だったら今日は、私も濡れて帰ろう。

広げていた傘を閉じて、私は彼から背を向けて歩き出した。濡らしていくは、雨。雨。小糠雨。

(後書き)

例えば君を、想った日。切なかつた日、区切りをつけた日、懐かしむ日。

傘を広げて

傘を広げて

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5582a/>

傘を広げて

2009年2月17日08時08分発行